



柏崎・刈羽地域 飼料用米「新潟次郎」栽培ごよみ

Ver. 2.2

700kgどりのポイント ①基肥多め ②確実な穂肥 ③いもち病・紋枯病防除

品種の特徴

- 穂数が少なく穂長が長い稲姿で、早期越路早生並の極早生
[田植5月3日頃→出穂7月18日頃→収穫8月27日頃]
- 耐倒伏性は極強[稈長82cm]
- いもち病、紋枯病にはやや弱

多収事例では、基肥が
しっかり入っています

病害・雑草防除

○いもち病、紋枯病は箱施用剤で防除する。

防除例：エバーゴルフオルテ箱粒剤 1箱当たり50g
(平成28年1月18日現在の登録にもとづき記載)

- 病害の発生が見られたら、直ちに追加防除を行う。
- 初期の雑草が発生すると、多肥のため繁茂しやすいので、
除草を徹底する。

施肥

化成肥料を使用し、基肥は窒素成分7kg/10a、穂肥は窒素成分3kg/10aを2回施用する。大豆跡は基肥を無肥料とする。

施肥例①：基肥－穂肥体系

基肥	高窒素エコマル18-8-8	40kg/10a
穂肥	選択	
	硫安	14kg/10a×2回
	塩安 尿素	12kg/10a×2回 6kg/10a×2回

穂肥1回目 6月23日頃
(出穂25日前)
2回目 7月4日頃
(出穂14日前)

実肥 穂肥2回施用後の葉色が葉色板5以下の場合、出穂期頃に施用する。
施用量は窒素成分1～1.5kg/10a程度

施肥例②：基肥－発肥料

スーパー元肥パワフル30 40kg/10a

生育の

めやす

穂肥前に葉色が葉色板で5以下になったら、窒素成分1.5kg/10a程度の追肥を行う。

生育ステージ	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉色(SPAD)	葉色(葉色板)
6月23日頃(1回目穂肥時)	52～58	550～580	41～43	5.5
7月4日頃(2回目穂肥時)	70～75	440～490	40～42	5～5.5

主な作業と管理のポイント

月	4月			5月			6月			7月			8月		
旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
ほ場選定			田植え			中干し		穂肥施用		栽培管理		収穫			
○<u>雀害防止</u>のため、ほ場は団地化し、屋敷周りでの作付けはしない。 ○収量確保と施肥コスト低減のため、低地力ほ場での作付は避ける。 ○いもち病、紋枯病の常発ほ場での作付は避ける。 ○大豆跡や休耕跡では、基肥は施肥せず、追肥で対応する。			○収量確保のため、5月10日頃までに移植する。 ○穂数を確保しにくいため、栽植密度は60株/坪とする。 (密植しすぎると紋枯病が出やすい) ○<u>田植え時に箱施用剤を使用し</u>、いもち病、紋枯病を防除する。			○初期の茎数増加が緩やかなため、中干しは田植え後35日をめやすに開始する。 ○茎数のめやす20本/株 (50株セットの場合24本/株)		○穂肥は、倒伏しにくいので収量確保のため、<u>遅れずに</u>基準量を確実に施用する。 1回目 6月23日頃 (出穂25日前) 2回目 7月4日頃 (出穂14日前)		○中干しは出穂1か月前までに終了し、その後は飽水管理を行い、早期落水はしない。 ○病害防除(いもち病、紋枯病) ほ場を確認し、発病が見られたら、直ちに追加防除を行う。		○収穫適期は黄化粃割合が85～90%になった頃以降とし、粃水分が低下してから刈り取る。 ○収穫期に雨が多い場合は、穂発芽に注意する。 ○収穫後は、地力低下を防ぐため、もみ殻や鶏ふんなどの低コスト資材で土づくりを行う。			